

## 特集 1. 基本概念の解説

## 最終回 外的確実性依存症とは – 現代の病\*\*

平成 20 年 7 月 28 日

## □ 概説

外的確実性と内的不確実性。これらの言葉は、これから多くの場面で使われる概念です。混乱を避けるため、ここでは前もって解説を行っていきたいと思います。

まずは簡単に説明すると、外的確実性とは自分の外にあって客観的に調整、測定、評価できることを示します。例えば、気温、湿度などの「数値情報」などが、こうした特徴をもつこととなります。

これに対して、内的不確実性とは、**自己の内部にあって、客観的に調整、測定、評価することが困難である**ことを示します。この内的不確実性をもつもの代表例が、生理・心理メカニズムなのです。

## □ 外的確実性のメリット

この外的確実性に注目して研究を行うと、以下のような利点を得ることができます。そのメリット大きいいため、今日の科学・技術は建築学も含め、おおむね外的確実性に基づく傾向にあります。

## 【外的確実性と 3 つの利点】

- 1. 数値化困難な情報がある程度無視できる
- 2. 主張が数値化されるため、比較・検討がしやすくなる
- 3. 主張が数値化されるため、(空間)技術によって操作が可能になる

例えば、外的確実性に注目した典型的な研究例では、「環境の情報」(気温、湿度など)と、それに対する「評価値」という 2 つの「数値情報」が重要視されます。あくまで極論ですが、「環境の数値情報」とその「評価値」さえあれば、例えば、何が理想的な温熱環境かについて結論づけることもできてしまうのです。

要するに、良好な「評価値」(快適、涼しいなど)が得られた環境が、理想的であるとされ、その時の「環境の情報」(気温、湿度、放射熱、気流など)が測定されるのです。そして、その「環境の

\*\* 初めて記事をご覧になる方は、必ず「[利用規約](#)」をご確認ください

数値情報」(気温、湿度、放射熱、気流など)を再現すれば、いつでもどこでも理想的な温熱環境が実現できると考えられるのです。

## □ 外的確実性のデメリット

明快な手法によって、明確な結論が得られる。こうしたメリットを受けられる反面、外的確実性に基づく研究には、以下のような短所があります。

### 【外的確実性と 3 つの短所】

1. 内的不確実性(生理・心理メカニズム)まではカバーしないため、ヒトの実態に即しているとは言いにくい
2. 数字の議論だけが独り歩きしやすい
3. 科学・技術によって全てが解決できると過信されやすい

自分の中であって、完全には測定、評価しきれない体温調節の働き、温冷感評価のメカニズムなどを、ある程度無視しても結論が出せる。これが外的確実性に基づく研究手法の一番の利点です。しかし、裏を返せば、内的不確実性までを考慮した、ヒトの実態に即した研究手法だとは言いきれないのです。

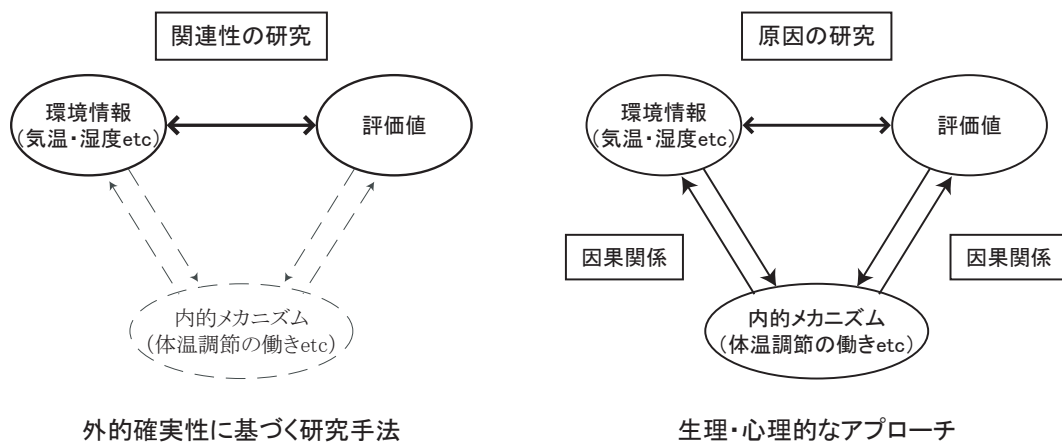


図1 外的確実性に基づく研究と生理・心理的アプローチ

生理・心理的アプローチ(右)は、内的メカニズムまでも考慮します。そのため、「環境情報」と「評価値」との因果関係まで分析可能。一方、外的確実性に基づく研究(左)で明らかにできるのは、厳密に言えば、それらの関連性のみとなります。

## □ 本質から離れた比較論

にもかかわらず、結論は明確な数値(e.g. 「理想的な環境 = 気温何、湿度何%、気流何 m/s

…)として現れてしまいます。結論や主張が数値化することによって、議論の比較・対照がしやすくなります。ところが、それが仇となり、数字だけが独り歩きし、「かえって本質から離れた比較論」が生じてしまうことがあります。「**実態に完全に即しているとは言えないのに、議論の比較・対照が可能となる**」。これが最大の欠点なのかもしれません。

例えば、「単純に温度や湿度さえ下げれば、快適になる」と考えたり、「高気密にすればするほど高性能となる」と考え、異常なまでに高気密にしたりするのも、「本題から外れた比較」、「無意味な競争」であるといえるのです。

## □ 外的确实性依存症

このように外的确实性の利点だけを享受し、全てを数値化し、科学や技術によってその数値目標をクリアしようとする。これこそが現代の病、外的确实性依存症なのです。物事を部分的にしか捉えないのです。

現代の家づくり論も、この病魔に冒されています。理想的な環境や空間についての数値目標が設定され、その目標値を空間技術（材料、形状、寸法、プラン）で解決しようとする。明確な数値目標しか見えないから、「定量化可能な空間技術によって全てが解決できると信じ込んでしまう」<sup>†</sup>。

あるいは、**数値目標の比較・対照を行うだけで、新たな空間技術を次々に生み出していく**。そうした実態とはかけ離れた技術論に振り回され、結局消費者は何を信じて良いかが分からなくなるのです。

## □ 現代日本の病状

さらに事態が悪化すると、消費者さえも、客観的に評価・比較可能な「材料、形状、寸法、プラン etc.」（空間技術）に依存し、家づくりを行うとします。つまり豊かさの空間的側面ばかりを注目してしまうのです。

その結果、相対的に豊かさの人的側面についての関心が薄くなり、実質的な生活レベルが低下してしまうのです。

当所は家づくりにおける人的な側面についての研究も行っています。つまり、人間技術論についての研究を行っていますが、これは、空間技術論の限界を指摘するために行っているのです。こうした指摘をしないと、外的确实性依存症の進行に歯止めをかけられない。それほどまでに、事態は深刻化しているのです。

<sup>†</sup> 空間先行型思想。良好な空間を用意すれば、ヒトは必ず快適になると信じ込んでしまうのです。

【寄付歓迎】当コラムは無料ですが、カンパは歓迎します。詳しくは[ご支援依頼](#)をご覧ください。